

部 会 報 告

(株) JAST, 東日本大震災・原子力災害伝承館見学会報告

機械部会 路盤・舗装機械技術委員会

1. はじめに

JCMA 機械部会 路盤・舗装機械技術委員会では、これまで年間行事として現場見学、工場見学を実施してきた。2025年度は、土木現場の様々な場面で使用されている超硬工具のメーカーである(株) JAST 様の本社工場と、2011年に発生した東日本大震災の記録を展示している東日本大震災・原子力災害伝承館を総勢20名で見学させていただいた。



写真—1 集合写真（正面入口前にて）

2. (株) JAST

2011年3月8日に茨城県日立市に設立した同社であるが、設立後3日目に東日本大震災に遭遇した。多大な被害を受け、翌2012年12月に福島県復興支援企業に応募し、指定を受けた。翌2013年8月に現在の福島県田村市に新工場の建設を開始し、2014年2月より操業を開始している。

社長のあいさつの中で、北陸新幹線のトンネル掘削工事で某ゼネコンと共同で取り組んだ掘削用のビットの開発での苦労話をされていたとおり、単品の開発も手掛けている。



写真—2 工場内見学の様子

(1) 工場見学

工場内では約20名が従事しており、そのうち2名は女性である。

工場内では、基礎工事で使用するハンマーグラブの製作やバケット部の交換作業、大型工作機械による機械加工、銀ロウ付による超硬部材の接合作業、シールド用ビットの製作など数百種類のビットや部材を製作している（写真—2）。



写真—3 銀ロウ付の実演

(2) 大切にしている特殊技能

母材と超硬部材の接合に使われるのがロウ付であり、非常に高度な技術を要する。今回、路盤改良などに用いられる2種類のビットのロウ付作業を実演いただいた（写真—3）。

母材に酸化防止用のフラックスを塗布し、高周波ロウ付用加熱装置で加熱、より密着性を高めるために銅

板と銀ロウを溶融して接合する技術は、熟練の職人の目で完璧に仕上げられていく。

昨今では、銀の価格が高騰しており、中国を始めとする海外の競合会社に価格では立ち向かえないというが、品質を大事にする職人の姿勢が伝わった。



図一 伝承館全景（伝承館 HP より）



写真一 語り部講和の聴講

3. 東日本大震災・原子力災害伝承館

田村市の JAST 様からバスで約 1 時間移動し、双葉町に 2020 年 9 月に開館した「東日本大震災・原子力災害伝承館」（以下、伝承館）を見学した（図一）。

2011 年 3 月 11 日に発生した地震、津波、東京電力福島第一原発事故という未曾有の複合災害の実態や、復興への歩みを展示している。

（1）語り部講和

当館では、実際に被災された地元住民による語り部講話が 1 日数回行われており、今回団体枠で聴講した（写真一 4）。

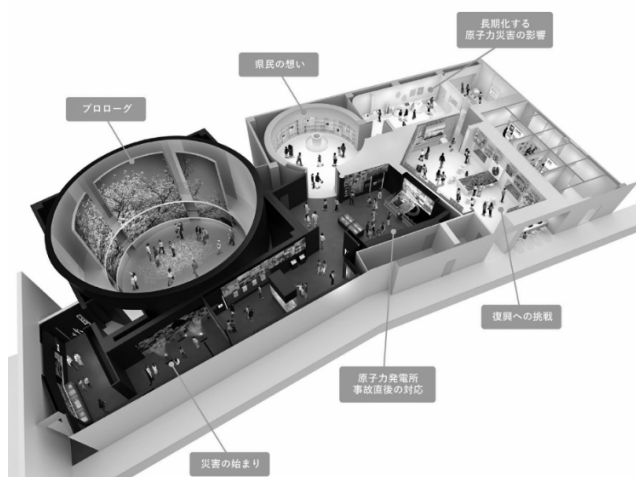
当日は、富岡町で当時 12 歳の時に被災した青年の語り部であり、被災当日から避難当時の経験談、そして復興中の富岡町の現在までのお話を約 40 分間聴講した。

被災者のリアルな経験談や思いが心に響いた。

（2）プロローグシアターから展示見学へ

語り部講和に続き、巨大な湾曲スクリーンに囲まれたホールに案内され、昨年亡くなられた福島出身の西田敏行さんの語りで復興までの道のりと課題が紹介された。その後、自由見学となるが展示施設は以下の 5 つのゾーンにより構成されている（図一 2）。

- ①災害の始まり
- ②原子力発電所事故直後の対応
- ③県民の思い



図一 2 展示全体図（伝承館 HP より）



写真一 5 津波により破壊された消防車

④長期化する原子力災害の影響

⑤復興への挑戦

被災現場から収集された様々な物や映像などの記録が展示されており、あらためて被害の大きさを思い知らされたとともに、防災意識を高めるためにも多くの人に訪れて欲しいと感じた。

4. おわりに

東日本大震災から令和 8 年 3 月で 15 年目の節目となる。今回、設立 3 日後に被災して福島に移転し再建した JAST 様、および震災と復興の記録を展示している伝承館を見学できたことは非常に感慨深いものであった。あらためて、JAST 様および伝承館を運営されているスタッフの皆様に心より感謝を申し上げます。



【筆者紹介】
相田 尚（あいた ひさし）
㈱ NIPPO 総合技術部
（一社）日本建設機械施工協会 機械部会
路盤・舗装技術委員会
副委員長